

国際音楽コンクール世界連盟の成立と
その初期の活動（1956～69）

—「国際性」と「公正性」の確立にむけて—

The World Federation of International Music Competitions in its Early Years (1956-69):
Towards the Establishment of the "Internationality" and the "Impartiality"

神保夏子

JIMBO Natsuko

国際音楽コンクール世界連盟の成立と その初期の活動（1956～69） —「国際性」と「公正性」の確立に向けて—

The World Federation of International Music Competitions in its Early Years (1956-69):
Towards the Establishment of the "Internationality" and the "Impartiality"

神保夏子
JIMBO Natsuko

序

今日、西洋芸術音楽を専門とする若手アーティストのキャリアの始動において、コンクールというシステムはきわめて重要な役割を担っている。中でも、様々な出自を持つ音楽家同士が国境を越えて競い合う国際音楽コンクールは、その権威と（少なくとも定義上は）インクルーシブな性質とを通じて、西洋芸術音楽文化のグローバル化にも大きく貢献してきた。19世紀末のロシア¹に端を発するとされる（Cline 1985: 203）近代的な国際音楽コンクールは、とりわけ第二次世界大戦後、ヨーロッパを起点として「雨後の竹の子のよう」（ホロウィッツ 1995: 83）な急発展を見せた。現在では「非西洋」諸国を含む世界各地で、「国際」を銘打った無数の音楽コンクールが日々開催されているが、その主要なものを統括し、運営上の指針や諸々のサポートを提供するメタ組織として機能しているのが、ジュネーヴに本部を置く国際音楽コンクール世界連盟 World Federation of International Music Competitions (WFIMC)²である。

1957年にヨーロッパの13の国際音楽コンクールの協同で設立されたWFIMCは、2018年現在、五大陸の110以上の都市を拠点とする122のコンクールをメンバーとし、これらの「国際的に承認された組織のグローバルなネットワーク」を形作っている（WFIMC 2018: 8）（図1）。このWFIMCの創設は、上述した戦後のコンクール・ブームとも密接な関連を持つもので、国際音楽コンクールの歴史における一つのターニング・ポイントとしてしばしば注目されてきた（cf. Cline 1985: 221; Bouckaert 2001: 180-181）。

文化社会学者のリサ・マコーミック Lisa McCormick³によれば、この連盟は、当時の国際音楽コンクールの隆盛を象徴するのみならず、コンクール界におけるユニヴァーサルイズムと文化的包摂の進展においても重要な役割を果たしてきたという。「専門的・倫理的な基準の明確化と強化を通じてコンクールの肯定的なイメージを促進する」（McCormick 2015: 59）ことを目標の一つとするWFIMCは、さまざまな利害が交錯する国際音楽コンクールの世界に、共通の理念と規範

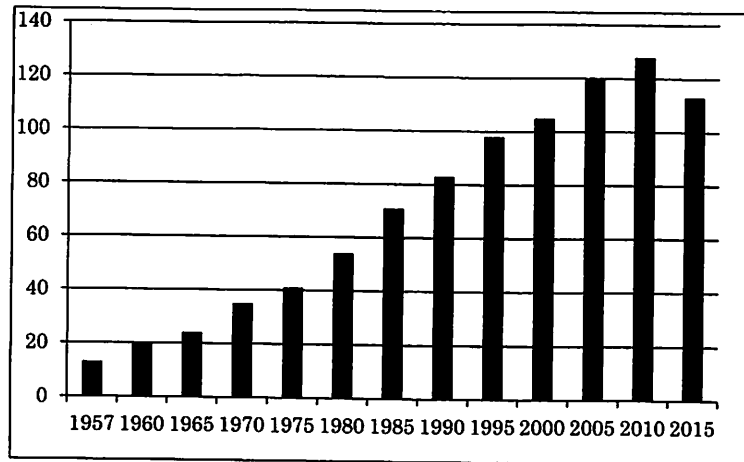


図1 国際音楽コンクール世界連盟 加盟団体数の変遷 (1957-2015)
McCormick (2015: 56) および WFIMC の Yearbook(2010; 2015) を基に作成

に基づく一定の秩序を与えてきた。それを最も明確な形で示しているのが、連盟の有する「定款 Statutes」(連盟の目的や加盟コンクールが備えるべき条件などを規定する)と「勧告書 Recommendations」(加盟コンクールの運営の具体的な指針を規定する)という二つの公式文書である。こうした成文化された規範は、マコーミックの指摘する通り、今日の国際音楽コンクールのフォーマットや要求事項、手続きなどの標準化をも推し進めてきた (McCormick 2015: 61)。

WFIMC をめぐるマコーミックの一連の議論 (McCormick 2015: 54-66) は、冷戦のさなかに設立されたこの国際組織が、上記のような規範やその厳格な統治機構を通じて、政治的に腐敗した当時の国際音楽コンクール界に直ちに文明的な改革をもたらしたような印象を与える。しかし、国際音楽コンクールの現状に焦点を定めたマコーミックの研究においては、この連盟そのものが辿ってきた道のりが史料に基づいて詳細に吟味されているわけではない。連盟は本当にその設立の当初から今日のように明確な目的や規範意識をもった組織であったのだろうか。WFIMC 設立の先導役を担ったジュネーブ国際音楽コンクール Concours de Genève⁵ (1939年設立) の通史を描いたマリー・デュシェヌヌ＝テガリ Marie Duchêne-Thégarid の研究⁶は、黎明期の連盟が現在のそれに比べかなりプリミティブな様相を持つものであった可能性を示唆している (Duchêne-Thégarid 2014: 154-158)。そうした原初的な連盟の在り方を知ることは、戦後のヨーロッパにおける国際音楽コンクールの状況の一端を垣間見せるとともに、今日のグローバルなコンクール文化の展開の一つの源泉を明らかにすることにもなるだろう。こうした見地から、WFIMC の設立

の背景と初期の活動の様相を、その組織としての規範的性格——とりわけ加盟コンクールの国際性と公正性の担保に関して——の有無に焦点を当てつつ、当時の1次資料に基づいて再検証することが本稿の目的である。

初期 WFIMC の内部状況を伝える主な資料としては、デュシェヌヌ＝テガリが参照したジュネーブ・コンクール関係のアーカイブ資料のほか、同コンクールの創立者で WFIMC の初代会長でもあった作曲家・音楽教育者のアンリ・ガニユバン Henri Gagnebin (1886-1977)⁷ の関係資料が挙げられる。本稿では、現在ジュネーブ音楽院 Conservatoire de musique de Genève の附属図書館に所蔵されているガニユバンのアーカイブ資料を主要な手掛かりとして、彼の会長在職中の WFIMC の状況に焦点を置いた調査・分析の結果を示す。ただし、同アーカイブの重要資料の一つである WFIMC の総会議事録は、1964年から69年(ガニユバンの退任の年)までの5年分に限られているため、第2節以降の議論はこうした資料の限定性に即したものである⁸。この他、ジュネーブ・コンクール事務局、そして現在の国際音楽コンクール世界連盟の事務局が保有するアーカイブ資料⁹も入手可能な範囲で参照した。

本稿は全3節から構成される。はじめに、本論の前提として、WFIMC の成立の背景とその初期の活動の実態について概観する。つづいて、同連盟の規範的性格の獲得を示す事象として、1960年代中葉における初の定款の成立と、新メンバーに対する加盟審査基準の問題を取り上げる。最後に、規範に抵触しうる加盟コンクールに対する連盟側の微温的な対応の例を紹介するとともに、コンクールの政治化が問題となる時代における連盟会長ガニユバンの理想主義的な態度について、当時の国際音楽コンクールの状況を踏まえて検討する。

1. 国際音楽コンクール連盟の起源

すでに述べたとおり、国際音楽コンクール世界連盟の誕生は、第二次世界大戦後のヨーロッパにおける国際音楽コンクールの乱立¹⁰をその主要な契機としている。これらのコンクールは、それぞれ設立の背景や母体となる組織、運営方法を異にしていたが、才能ある若手音楽家の発掘とキャリアの促進を主要な目的に掲げ、すべての国籍のコンテストを審査の対象として受け入れることを謳っている点が多くの場合共通していた。戦争によって多かれ少なかれその活動に制約を受けていた若い音楽家たちは、戦後こうしたコンクールに文字通り殺到することとなる¹¹。様々な国の音楽家・音楽関係者たちが一堂に集う国際音楽コンクールの繁栄は、長い苦難の時期を超えてようやく訪れた平和の象徴でもあった。

こうした中、増加し続けるコンクール同士の間では、審査員や参加者の獲得、コンクールとしての権威などをめぐって、次第に激しい競争が生じるようになった。戦後の多くの新興コンクールのモデルとなったジュネーブ・コンクールのような組織にとっても、相次ぐ同種のイベント

の設立は、喜ばしいというよりはむしろ警戒すべきものと映った (cf. Duchêne-Thégarid 2014: 152-153)。一方、国際音楽コンクール文化の隆盛は、若いコンテスタントのみならず審査員や来賓の往来を通じて、ヴェテランの音楽家の越境や幅広い交流をも促すこととなる。とりわけ各コンクールの幹部を務める音楽家たちは、他のコンクールから招聘を受けることが多く、様々な都市での審査や視察の経験を通じて、次第に同業者たちとの間にゆるやかな人的ネットワークを築いていった。WFIMC 設立の構想もまた、こうしたコンクール関係者同士の交流を通じて生まれたものであった。

1956年11月6日のジュネーヴ国際音楽コンクール組織委員会の議事録は、連盟設立の直接の契機となったとある発議の様子を以下のように伝えている。

〔ジュネーヴ・コンクール委員の一人である〕マレスコッティ氏¹²は、昨今ジェノヴァ〔バガニーニ国際ヴァイオリン・コンクール〕とヴェルチェッリ〔ヴィオッティ国際音楽コンクール〕の審査員を務めた。氏はその際に幾人かの要人と話していて、国際コンクール主催者業界を支配している、ある漠然とした危機感に気付いた。この種の文化行事の増加とその組織の多様性は、「プロ」出場者や「プロ」入賞者と定義し得る新手的音楽家の出現を許したのである。彼らは〔様々なコンクールの〕日程や曲目、規則の違いを巧妙に掌握し、芸術の追求という自らの活動を、産業・商業さらには観光のそれにまで拡大し、最小限の才能のかけらでもって旅する手はずを整えている。彼らはそれによって、スポーツ用語でいうところの「アマチュア」や「純粋」な人々のしかるべき利益をしばしば妨げることがある。多くの〔国際音楽コンクールの〕主催者がこうした悪しき展開への対策を求めており、この意味で、様々な「国際コンクール」同士の間について緊密な紐帯を結ぶことによって第一歩が踏み出されうるといふ考えがますます広がっているように思われる。¹³ (下線は引用者による)

増え続ける国際音楽コンクール同士の間には、ライバルとしての対立ではなく、共通の問題の解決のための相互協調をもたらそうというこの発案は、幾らかの審議を経て可決された。これを受け、当時ジュネーヴ・コンクールの会長を務めていたアンリ・ガニュバンは、他のいくつかの同様のコンクールへの呼びかけを行った (Duchêne-Thégarid 2014: 155)。1957年2月、ヨーロッパ8か国の13の国際音楽コンクール (次頁の表の星印を参照)¹⁴の代表者がジュネーヴに集い、最初の会合が開かれる。この場で満場一致をもって成立したのが、「ヨーロッパ・コンクール連盟 Fédération des Concours d'Europe」¹⁵、後の国際音楽コンクール世界連盟 (WFIMC) である。この連盟が目指したものは、各メンバーの「自律性」を保ちつつも、「協同と調停」¹⁶をキーワードに問題解決を図っていけるような、友好的な共同体の創成であった。「当初の我々はクラブだっ

表 国際音楽コンクール連盟初期メンバー (1957-69) ★印: 創立メンバー

国名	都市名	コンクール名	加盟年
イタリア	ボルツァノ	フェルッチョ・ブゾーニ国際ピアノ・コンクール★	1957
ベルギー	ブリュッセル	エリザベート王妃国際音楽コンクール★	1957
ハンガリー	ブダペスト	ブダペスト国際音楽コンクール★	1957
スイス	ジュネーヴ	国際演奏コンクール (ジュネーヴ国際音楽コンクール) ★	1957
イタリア	ジェノヴァ	バガニーニ国際ヴァイオリン・コンクール★	1957
ベルギー	リエージュ	弦楽四重奏コンクール★	1957
西ドイツ	ミュンヘン	ARD国際音楽コンクール★	1957
イタリア	ナポリ	アルフレード・カゼッラ国際ピアノ・コンクール★	1957
フランス	パリ	ロンティエール国際コンクール★	1957
ポーランド	ポズナン	ヘンリク・ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリン・コンクール★	1957
チェコスロバキア	ブラハ	ブラハの春国際音楽コンクール★	1957
イタリア	ヴェルチェッリ	ジャン・バッティスタ・ヴィオッティ国際音楽コンクール★	1957
ポーランド	ワルシャワ	フリデリク・ショパン国際ピアノ・コンクール★	1957
スペイン	バルセロナ	マリア・カナルス国際音楽コンクール	1958
フランス	ブザンソン	国際若手指揮者コンクール	1958
フランス	トゥルーズ	トゥルーズ市国際声楽コンクール	1958
オーストリア	ウィーン	ベートーヴェン国際ピアノ・コンクール	1958
スイス	ジュネーヴ	マリー・ジョゼ王妃国際作曲コンクール	1958
ルーマニア	ブカレスト	ジョルジュ・エネスク国際コンクール	1961
東ドイツ	ツヴィッカウ	ロベルト・シューマン国際ピアノ・声楽コンクール	1963
イタリア	ローマ	アカデミア・サンタ・チェチーリア国際コンクール	1964
スイス	ジュネーヴ	オペラ・バレエ作曲コンクール	1965
ベルギー	ブリュッセル/ ブリュージュ	声楽コンクール	1965
イギリス	リーズ	リーズ国際ピアノ・コンクール	1965
東ドイツ	ライプツィヒ	J.S. バッハ国際コンクール	1965
イスラエル	エルサレム	国際ハーブ・コンクール	1966
カナダ	モントリオール	モントリオール国際音楽コンクール	1966
ブラジル	リオデジャネイロ	声楽・ピアノ伴奏コンクール	1966
ポルトガル	リスボン	ヴィアナ・ダ・モッタ国際音楽コンクール	1968
ウルグアイ	モンテビデオ	国際ピアノ・コンクール	1968
フィンランド	ヘルシンキ	ヤン・シベリウス国際ヴァイオリン・コンクール	1969
イギリス	ロンドン	カール・フレッシュ国際ヴァイオリン・コンクール	1969
モナコ	モナコ	ピエール大公国際作曲コンクール	1969

McCormick (2015: 251-2) を基に作成

た。定款も委員会もなし。素敵だった」(Gagnebin 1975: 274) と後にガニユバンは振り返る。その様相は、多数の加盟組織と「民主的な統治機構、厳格な会則、定期的な業績考査の手順」(McCormick 2015: 58) を有する今日の WFIMC の姿とは大きく異なっていた。

設立当初より、連盟の活動の最重要部分をなしていたのは、加盟コンクールの代表者が集う年に一度の総会であった。そこでは個々のメンバーが活動報告を通じて自らの経験や知見を分かち合うとともに、当該年度のコンクールの日程や曲目の調整（これらは上述の「プロ出場者」対策を目的とするものでもあった）などに関する様々な議論が行われた。総会で決定された各コンクールの日程は宣伝用の簡素な冊子（図2）にまとめられ、各国の音楽教育機関などに広く配布された。総会に集った代表者らはまた、会議の合間の食事会や音楽鑑賞などを通じて相互の親睦をも深めた（図3）。

一方、連盟の実務に関する事柄の多くは、発起団体であるジュネーヴ・コンクールが引き受けることとなった。創立会議の開かれたジュネーヴはそのまま連盟の本部となり、ジュネーヴ・コンクール会長のガニユバンが WFIMC の会長をも兼任した。連盟の事務局もまたガニユバンが院



図3 1960年ジュネーヴ総会での昼食会の様子
Conservatoire de musique de Genève, FHG M8 (Fonds Henri Gagnebin)

長を務めるジュネーヴ音楽院に置かれ、会計・編集その他の事務作業はすべてジュネーヴ・コンクールの事務局が担当した（Duchêne-Thégarid 2014: 155-6）。総会のみは各加盟コンクールの持ち回りで異なる都市でも行われたが、それでも2年に1度はジュネーヴがホスト役を務めるのが慣例となっていた。言い換えれば、初期の連盟は確かに「国際的」な交流の場としての機能は果たしていたが、その内実はとりたててグローバルなものであるとは言い難く、むしろジュネーヴ中心のかなりローカルな組織としての性格が強かった¹⁷。そこには当然、当時の加盟コンクールの地理的分布の偏りも大いに関係していたであろう。1950～60年代の連盟は年々様々な国から新たなメンバーを獲得しつつあったが、依然として加盟組織の9割はヨーロッパを拠点とするコンクールで占められていた（前掲の表を参照）。モスクワのチャイコフスキー（1958年設立）、米国フォートワースのヴァン・クライバーン（1962年設立）などの重要なコンクールが設立されたのちも、こうした傾向はそう簡単には変わらなかった。創立以来ジュネーヴ＝ヨーロッパを中心として展開されてきた連盟が、「世界 World」の語を名に冠し、真の意味での「文化的包摂」(McCormick 2015: 65) の場を体現するようになるのは、もっぱら1990年代以降のことである。

2. 定款の成立と加盟審査

前節で述べたとおり、当初は同業者同士の親密な集いという性格が強かった WFIMC であるが、創立10年目を目前に控えた1966年——この時までに加盟コンクールの数は当初の2倍強に膨ら

FÉDÉRATION
DES
CONCOURS
INTERNATIONAUX

*
SAISONS
1958-1959
*

FÉDÉRATION DES CONCOURS INTERNATIONAUX
Années 1958-1959

BRUXELLES - BRUSSELS - BRUSSELS - BRUSSELLE
Concours musical international (Reine Elisabeth de Belgique)
Du 1^{er} au 31 mai 1958 et 1959
Niveau: Plein
Lettres d'avis: 31 mai au moins 50 ans au plus
Date d'inscription: 15 janvier 1958 (avant)
15 janvier 1959 (après)
Moyens des prix: 12.200 belgas
Adresse: Palais des Beaux-Arts de Bruxelles, 11 rue Benoît Morel (Bruxelles) (Belgique)

GÈNES - GENOVA - GENOVA - GENOVA
Concours international de musique "P. P. Pasquini"
Du 3 au 11 octobre 1958
Niveau: Plein
Date d'inscription: 31 mai 1958
Adresse: Libreria Musicale Pasquini Via Diaz 56 Genova (Italie)

GENÈVE - GENEVA - GENÈVE - GINEVRA
14^e Concours international d'exécution musicale
Conservatoire de Genève
Du 29 septembre au 4 octobre 1958
Choir - Piano - Clavier - Violon - Flûte - Trombone
Chœur non cantabile de tous les pays. Âge de 15 à 50 ans.
Date d'inscription: 15 juillet 1958
Moyens des prix: 11,5 millions
Adresse: Secrétariat des Concours au Conservatoire musical,
Conservatoire de Musique, Genève (Suisse)

LIEGE - LUETTICH - LIEGI
Concours international de Musique, "Ville de Liège"
Du 8 au 17 septembre 1958
Interprétation d'œuvres pour quatre à cinq
sans double l'organe, excepté aux concertos de tous les pays
Date d'inscription: 31 juillet 1958
Adresse: 21 avenue Victor Henri, Liège (Belgique)
Administrateur: Louis Foidot

図2 国際コンクール連盟の最初期のパンフレット（1958-59年度 pp.1-2）
資料提供: World Federation of International Music Competitions

んでいた——に節目が訪れる。この年に起こった重要な出来事の一つが、パリに本部を置く UNESCO の諮問機関、国際音楽評議会 International Music Council (IMC)¹⁸への加盟である。これは、数年前から毎年のように総会の議題に上りつつも、情報不足などの理由で繰り返し判断が保留されていた案件であった。「国際音楽コンクールの国連」(McCormick 2015: 54) という今日の WFIMC が打ち出しているイメージは、この IMC との関係によるところも大きいと思われるが、初期の連盟にとっては、国連の下に名を連ねることの利点は必ずしも自明ではなかったようである。

この年におけるいっそう重要な出来事は、連盟の目的や組織の詳細、加盟の条件などを成文化した初の定款の制定である。もっとも、この最初の定款はタイプ打ち片面 1 枚のごく簡素な文書であり、十数ページにわたる今日のそれとはかなり様相を異にするものであった (図4)。現在の WFIMC は、定款のほかに加盟コンクールへの推奨事項をまとめた「勧告書」(1996年総会より採用、随時改訂) と呼ばれる文書を有している。この勧告書は、審査員やレパトリーの選び方から審査方法・褒賞・交通や宿泊の手段の指示までも含んだ、国際音楽コンクール運営の実務に関わる実践的なガイドラインとなっている。一方、1960年代の連盟には、このような細則は当然存在していなかったし、各コンクールの運営のレベルを監視するような仕組みもなかった。それでも、創立から10年近くたつてようやく作成された上記の定款の存在は、連盟の使命とメンバーに求められる資質を公式に明確化したという点で十分に効果のあるものであった。それが最も直接的な形で機能したのは、新規で加盟を申請してくるコンクールの受け入れに関する局面であったと思われる。

今日の WFIMC においては、新規メンバー候補の加盟の可否は既存メンバーによる総会での投票によって厳正かつ民主的に決められる。同様の加盟審査のシステムは、遅くとも1960年代前半にはすでに存在していたが、その可否の基準はかなり曖昧なものであった。ガニユバンはこの加盟審査の問題を「デリケートな点」(Gagnebin 1975: 274) と評している。「新しいコンクールの出願はふるいにかけられ、容易には加盟を許されなかった。一つならざるコンクールが、モリエールのいうところの『我らが医師団に加わるにふさわしい価値』¹⁹を認められなかった」(Gagnebin [c1973])。1960年代に加盟を却下ないし見送りとされたコンクールの例を当時の総会議事録に基づいて検討してみると、その多くは申請書類の不備やデータ不足、コンクールとしての実績の短さなどを理由としていることがわかる。しかし中には、課題曲が易しすぎるというようなややイレギュラーな理由で加盟を退けられているものもある。今日ではこの種の加盟基準の目安は定款や勧告書によってかなり細かく指示されており、加盟を希望するコンクールはそれに合わせてある程度準備を整えることができる。しかし初期の連盟ではそうした基準自体が明文化された形では存在しなかったため、新しい応募が来るたびにその都度ケース・バイ・ケースでの議論が総会で行われていた。加盟申請が行われてから正式な加盟認定がなされるまでにしばしば

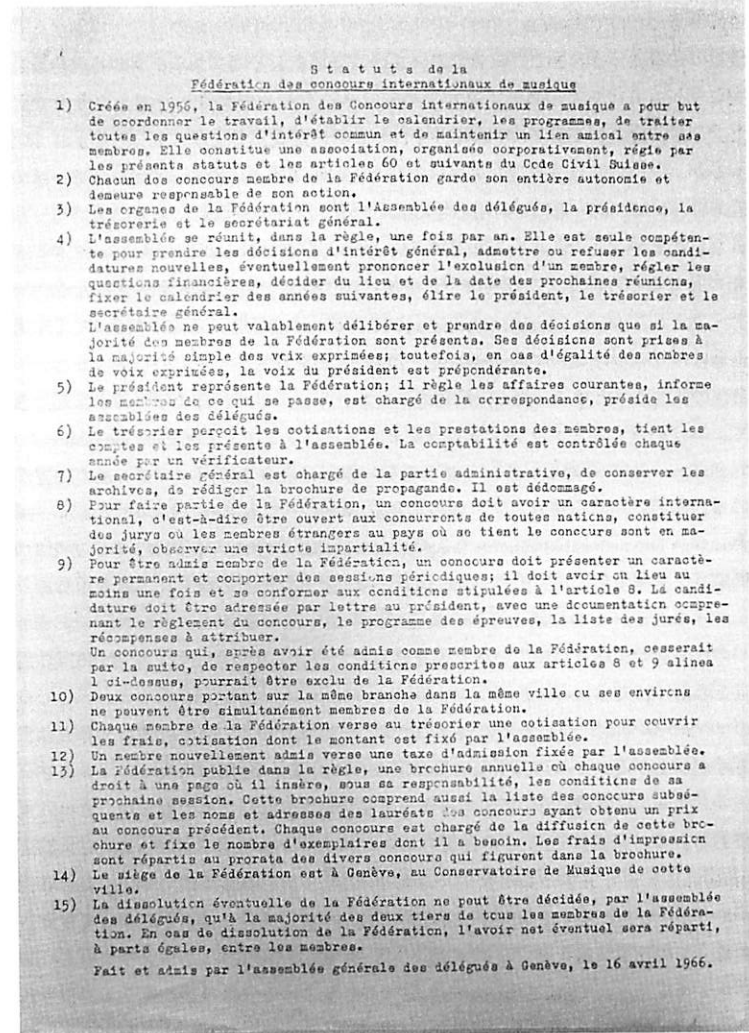


図4 国際音楽コンクール連盟 初の定款 (1966)

Conservatoire de musique de Genève, FHG E 157 (Fonds Henri Gagnebin)

数年を要したのもそのためである。1966年の定款は、そうした認定の基準の一部を初めて明確な形で公に示したものであった。

この最初の定款は、それまでの総会で議決された事項をもとにジュネーヴの特別委員会がまとめた草案に基づくもので、1966年4月17日のジュネーヴ総会で微修正を加えたうえで正式に採択された。そこに含まれる条文の中には、今日の最新の定款まで変わらず引き継がれているものも存在するが、中には既に妥当性を失い、消滅したものもある。その一つが、「同一都市あるいはその近郊において、同一部門を対象とする二つのコンクールが同時に連盟のメンバーとなることはできない」という、今日から見ればやや不合理とも思われる規則である。1966年版の定款の第10条として定められたこの規則は、元を辿れば1964年の総会議事録に見られるピアニストのマリア・カナルス Maria Canals i Cendrós (1914-2010) の発議によるものであり、「地域内での競合に迅速にけりをつける」(Gagnebin 1975: 274) ことを目的とするものであったという。コンクール自体の質的水準とはまったく無関係のこのルールによって加盟希望が却下された事例の一つとして、バリのマгда・タリアフェロ国際ピアノ・コンクール Concours international de piano Magda Tagliaferro (1957年設立、1966年加盟申請) が挙げられる。同コンクールの加盟が問題となったのは、同じくバリを拠点とし、連盟の創立メンバーでもあったロン＝ティボー国際コンクール Concours international Marguerite Long-Jacques Thibaud (1943年国内コンクールとして設立、1946年国際コンクール化、1957年 WFIMC 加盟) のピアノ部門との競合によるものであった。タリアフェロ・コンクールの加盟の可否の決定は、申請年度の総会におけるロン＝ティボー・コンクールの代表者の欠席を理由にいったん見送られたが、同代表が出席した翌1967年の総会で、この規定を理由に15対3で否決された。

新規のコンクールに対しては厳しく既存のメンバーには甘い、こうした連盟の体質は、別の事例からも浮かび上がる。この1966年の定款に定められた重要な条項の一つに、「メンバーの過半数が当該コンクール開催国以外の者である審査員団を構成」しなければならないという規定(第8条)がある。この条項は、「全ての国籍のコンテストを受け入れる」こと、「厳格な公正性(impartialité)を遵守」することという条件とともに、「真に国際的な」(Gagnebin 1975: 274) コンクールたることを証明する基準として定められ、今日の定款まで引き継がれてきた。やはり1964年の総会での議論に端を発する²⁰この規定は、同年に応募のあったイタリアのトリエステ市賞作曲コンクール Premio Citta di Trieste の加盟の可否をめぐる議論の延長線上で採択されたものであった²¹。審査における「不正な圧力を回避する」(Gagnebin 1975: 274) ためのこうしたルールの設定は、コンクールで起こりがちな不正や審査の偏りに対し具体的な形で一石を投じるもので、国際音楽コンクールにおける公正性の確立に向けての大きな一歩であったと言える。

問題は、このルールの導入が満場一致で可決された1964年の総会の時点で、この条件を満たしていない既存の加盟コンクールがおそらく複数存在していたという点にある。実際、定款制定

の翌年にあたる1967年のプラハでの総会においては、連盟の創立時からのメンバー、プゾーニ国際ピアノ・コンクール Concorso Pianistico Internazionale Ferruccio Busoni を含む複数のコンクールの代表者から、審査員の過半数を外国人とすることは事実上不可能であると訴える声が上がっている。そもそもショパンやロン＝ティボーのような著名な国際音楽コンクールにおいても、初期の段階では審査員の大半を開催国のメンバーが占めるという状態は珍しくなかった。この二つのコンクールの場合は、連盟設立時には既に上記の国籍条件を満たした状態にあったが、仮にそうでなかったとしても、連盟側でそれを取り締まることができるような公式な規則は1966年まで存在しなかったのである。次節で取り上げるバルセロナのマリア・カナルス国際ピアノ・コンクール Concorso internacional de piano Maria Canals (1954年設立、1958年 WFIMC 加盟) の事例は、こうしたルールの不在が問題化した顕著な例の一つであった。

3. 国際性と公正性

ここまで見てきた通り、初期の WFIMC はメンバー同士の協同や調停を旨とし、各コンクールの自律性を前提とする比較的ゆるやかな組織として出発していたため、個々の加盟コンクールの在り方を監視したり、何らかの指示を上から与えたりするような規範的なシステムを事実上持ち合わせてはなかった。前節の最後で述べたマリア・カナルス・コンクールをめぐる問題は、それゆえ連盟の外部から寄せられたクレームを発端としたものだった。

告発者となったのは、このスペインのコンクールに毎年多くの参加者を送り込んでいた隣国フランスのバリ国立高等音楽院 Conservatoire national supérieur de musique de Paris、仲介役を務めたのはフランスの文化外交機関であるフランス芸術活動協会 Association française d'action artistique (AFAA) である。ガニュバンのアーカイブには、1960年代のカナルス・コンクールの運営状況をめぐる AFAA とガニュバンの往復書簡が残っている²²。これらの書簡によれば、同コンクールは1966年11月以来のバリ音楽院および AFAA による問い合わせに対し、コンクールの審査員構成その他の必要な情報や資料を提供しようとしなかった。注目すべきは、こうした告発の中で、1964年の同コンクール²³に関し「審査員の過半数が外国人ではなく、そのうちの数名は審査の全体に出席していなかった」(下線は引用者による) ことが挙げられている点である。AFAA 会長フィリップ・エルランジェ Philippe Erlanger は、1967年2月13日付のガニュバンあての手紙の中で、「FCIM (WFIMC の当時の公式名称である Fédération de concours internationaux de musique の略称) 会員において運用中の規則と、それを遵守するために可能な方法」を尋ねることで、当該コンクールのルール違反を暗に非難しつつ、連盟会長の権限によるその是正を求めている。

これに対し会長ガニュバンは、求められた情報の提供に応じる一方で、1966年採択の定款における「外国人審査員過半数」の規定はそれ以前に遡っては適用されないとし、その他の点に関

してもカナルス・コンクールの運営の妥当性を保証する旨の回答を行った。こうした擁護の裏側にはおそらく、ガニュバン自身が1958年以来毎年のようにこのコンクールの審査員長ないし審査員を務めていたという事情が関係しているであろう²⁴。

しかし、いっそう興味深いのは、パリ音楽院側がAFAAを通じて連盟側にこのような訴えを起こしてきたその背景である。前述の通り、パリ音楽院はカナルス・コンクールに例年まとまった数の卒業生（留学生も含む）を派遣し、多くの入選・入賞者を輩出してきた。この音楽院を窓口として、フランスからの海外コンクール出場希望者に助成金を供出していたのが、フランスの音楽家の国際的な活躍の推進を使命とする、件のAFAAであった。グスタフ・アーリンク Gustav Alink 編による国際ピアノ・コンクールのデータブック（Alink 1990: 30）によれば、問題となっている1964年のカナルス・コンクールにおいては、エルランジェの指摘する通り、審査員8名中半数にあたる4名が開催国スペインの出身であった。しかし、おそらく一層重要なのは、この年フランスからの参加者がこのコンクールで一人も入賞・入選できなかったという事実であったと思われる。上述のデータブックに掲載された入賞者リストを見る限りでは、審査員におけるスペイン人の比率が多かったからといって、この年のカナルス・コンクールの審査が際立ってスペイン人コンテスト員最良であったというわけではなさそう²⁵。しかし、1961年から63年にかけてこのコンクールで毎年複数の上位入賞者を輩出してきたフランスとしては、自国コンテスト員の突然の劣勢を受け、何らかの審査上の不正の可能性を疑わないわけにはいかなかったであろう。

こうした問い合わせの背景には、当時のパリ音楽院が抱えていた固有の問題があった。エルランジェの手紙に添えられた1966年11月10日付けのパリ音楽院からマリア・カナルス宛の手紙の中には以下のような一文がある。

音楽院は現在、国際コンクールの要求に見合った運営水準を確証出来るかと判明したコンクールに努力と参加を集中させることを目指して、国際コンクール関連の政策の見直しを行っています。正確な情報を得ようと貴殿にお問い合わせするのもこうした意図によるものです²⁶。

ここで言及されている「国際コンクール関連の政策」とは、まさにこの1966年、同音楽院に新たに設置された「上級教育課程 le cycle d'études de perfectionnement」、通称「第三課程 troisième cycle」を指すものと考えられる。この課程は、戦後の国際音楽コンクールの急速な発展とこれに伴う国際競争の激化を受けて打ち出された苦肉の策の産物というべきもので、パリ音楽院の第一等賞受賞者の中からとりわけ優れた者だけを極めて、国際音楽コンクールでの上位入賞を目指した強化訓練を行うコースであった（神保 2018: 38）。当時のフランスは、国際音楽コンクール

界において特別弱小であるというわけではなかったが、パリ音楽院の関係者たちは、自国の若手音楽家らがその本来の能力に比して国際舞台での十分な成果を得られていないという危機感を募らせていたのである。

こうした危機感は、パリのロン＝ティボー・コンクールを含む当時の多くの国際音楽コンクールにおいて、国家当局の強力なバックアップを受けたソ連のコンテスト員たちが上位入賞を総なめにしていったという状況と密接な関係を持っている。このソ連勢の圧倒的な強さの背景には、国際音楽コンクールに的を絞ったエリート教育制度や厳格な国内選抜に加え、コンテスト員の派遣先に関する戦略的な取捨選択があった。すなわちソ連当局は、派遣先候補のコンクールに関し、自国にとって入賞に有利な条件を備えているという確証が得られなければ、そもそもコンテスト員を送り込まないという決断を下していたのである。こうした派遣の可否の判断において、審査員の構成は最も重要な位置を占めていた。そして、万全の対策にもかかわらず自国のコンテスト員が入賞できない場合には、ソ連側はむしろ当該コンクールの審査そのものが「客観性」を欠いているとした（Tomoff 2015: 70ff）。パリ音楽院による第三課程の設立、そしてカナルス・コンクールの審査状況に関する執拗な問い合わせは、こうしたソ連の対国際コンクール戦略をそのまま模倣したとはいえないまでも、少なくとも同様の発想を根底に持つものであったといえよう。WFIMCがその最初の定款の作成に取り掛かっている同じ頃、加盟コンクールの現場では、このように国家の威信をもかけた熾烈な戦いが繰り広げられていたのである。

それでは、この連盟のイニシアティブをとっていたジュネーヴ・コンクール、あるいは連盟そのものが拠点を置くスイスという国においては、国際音楽コンクールでの勝敗をめぐるこうしたナショナリズム的な争いは深刻な問題にならなかったのか。結論から言えば、ジュネーヴ・コンクールは主要な国際音楽コンクールのなかでもソ連のコンテスト員による覇権が達成されなかった数少ない例の一つであった。WFIMCの成立とちょうど同年にあたる1957年に、ソ連は初めてジュネーヴ・コンクールへの参加の意思を表明しているが、自国の審査員の派遣が認められなかった²⁷ためにこれを取り下げることとなった。後年にわたっても、ソ連のコンテスト員はジュネーヴでは他のコンクールでのような圧倒的な活躍を見せてはいない。その正確な理由は不明だが、このコンクールが審査の公正性を担保するため、カーテン審査をはじめとする独自の極めて厳格な体制を敷いていたことが関係している可能性はある。ジュネーヴ・コンクール側の委員の中には、ソ連の参加表明に対し警戒心をあらわにする者も少なくなかった。しかし、同コンクールの会長でもあるガニュバンは、「[すべての国籍の] 芸術家」の受け入れという国際音楽コンクールの最も基本的な規定に照らして、ソ連の参加者を拒むことは出来ないとの見解を示した²⁸。そして実際に同コンクールにおいては、ソ連による「コンクール荒らし」の問題は杞憂に終わったのである。

自ら国際音楽コンクールを設立し、WFIMCの会長まで務めたガニュバンは、コンクールを通

した国家間の代理戦争状態に対して、もちろん無関心であったわけではない。そもそも1939年のジュネーヴ・コンクールの設立自体、間接的にはその2年前にブリュッセルで行われたイザイ国際コンクール Concours international Eugène Ysaÿe (現在のエリザベート王妃国際音楽コンクール) におけるソ連勢の圧勝に端を発していた。この1937年のコンクールにおいて、スイスのコンテスタントらは大敗をきたし、当時ジュネーヴ音楽院の院長を務めていたガニユバンのもとには、政府からスイスの音楽院教育の責任を問う通達が届いた。こうした上層部からの圧力を受け、ガニユバンは国際音楽コンクール以前に、まずはスイス国内向けのコンクールを設立する計画を立てている (Duchêne-Thégarid 2014: 18-19)。この国内コンクールの計画は財政的な問題で頓挫するが、コンクールにかかるガニユバンの情熱の根底には、こうした事情を受けての教育者としての責務があった。

一方、残された発言を見る限り、政治の問題を音楽の領域に持ち込まないことが、国際音楽コンクールの運営者としてのガニユバンの一貫したポリシーであったようである。彼は同時代のコンクールに見られるナショナリズム的な風潮を嫌い、コンクールというイベントが純粋に音楽文化と国際親善の発展に寄与する存在となることを望んでいた。ジュネーヴ・コンクールの委員会におけるソ連の参加をめぐる議論の中で、彼は次のように述べている。

我々の唯一の目的、最も重要な役割は、あらゆる真の才能の出現を手助けし、芸術的次元での諸関係の発展と緊密化に貢献することである。なぜなら、音楽はおそらく現在において、まさしく苦しみ分裂した世界を支えることのできる唯一の結び目でありうるということがますます確認されるようになってきているからだ。したがって我々の活動の枠組みは、この特別な場合において、「まず政治を」というモーラス²⁹的な要請を退け、「まず音楽を」という高邁な名言をもってこれに代わることを我々に促すのでなければならない³⁰。

1957年に WFIMC が設立された時、「音楽コンクールは (……) ナショナリズム、イデオロギー、身内最良によって荒廃」(McCormick 2015: 59) した状態にあった。連盟の主要な目的が、マコーミックの言うように「専門的・倫理的な基準の明確化と強化を通じてコンクールの肯定的なイメージを促進すること」³¹であったとするならば、その要因はたしかにこうした時代背景にあっただろう。連盟の発起人であるガニユバンもまた、上述の通り、国際コンクールにおける音楽と政治の分離に対し確固たる理想を抱いていた。しかし、現存する資料から確認される限りにおいては、彼の在職中、連盟の内部でマコーミックのこのような理念が具体的に議論に上ったり追求されたりした形跡はない。

1969年にガニユバンは連盟の会長を退任し、名誉会長の座に就くこととなる。同年に改訂された定款においては、今日まで受け継がれる以下の文言が連盟への加盟条件として新たに追加さ

れることとなった。「連盟のメンバーとして承認しうるものとなるためには、音楽コンクールは (……) いかなる商業的な性格をも持たず、純粋に芸術的・文化的な目的を追求するものであること」(下線部は新しく追加された部分)。この禁止事項に「政治的」という文言が含まれなかったのは、それを排すること、あるいはその不在を証明することが実質的に不可能であったからであろうか。しかし、ガニユバンの後任として WFIMC の二代目の会長となった彼の右腕、アンドレ＝フランソワ・マレスコッティのもとで、連盟の「精神は一変」した。そこでは新たに監視役としての「委員会が結成」され、今やその「総会は小さな議会のようになった」(Gagnebin 1975: 275)。WFIMC が定款の度重なる改訂や勧告書の導入といった改革とともに、「国際性」と「公正性」の真の達成に向けて発展を遂げていったのは、創立者のガニユバンが連盟を去ってからは後のことであった。

結論

本稿では、国際音楽コンクール世界連盟 (WFIMC) の黎明期の状況の検証を通じて、この連盟が半ばインフォーマルな同業者間の内輪の集まりから、徐々に公的な国際機関としての性格を獲得していく、その最初の段階の一端を明らかにした。WFIMC 設立の当初の目的は、必ずしも今日のそれが掲げる大義と同様ではなかった。最初期の連盟は、何らかの明確な基準や規範によって国際音楽コンクール全般の水準を向上させるというよりはむしろ、激化するコンクール同士の競争の中で加盟組織を権威化することを通じて、集団としての生き残りを図ろうとしていた。当時の資料から垣間見えるのは、国際音楽コンクールという新たな音楽文化の発展において生じる諸問題の解決を目指しながらも、同時に各々の関与するコンクール組織の利害にも無関心ではいられない、初期の連盟メンバーの姿である。彼らの意識の根底に、今日の連盟の活動方針にも通じるコンクールの質向上への関心があったことは間違いないだろうが、それが具体的かつ公正な規範という形に結実するまでには、長い年月を要した。

初代 WFIMC 会長のアンリ・ガニユバンは、国際音楽コンクールの使命についての理想主義的な観念を持ち、連盟の平和的な運営に尽力したが、各々の加盟コンクールが抱える音楽外の問題を払拭するまでの効力を持つ制度を確立するには至らなかった。とはいえ、彼の在任中に成立した連盟最初の定款において、今日まで続く国際音楽コンクールの「真の国際性」の条件が明記されたことは特筆に値する。厳しい審査を潜り抜け、晴れて WFIMC のメンバーになった国際音楽コンクールには、参加者および審査員の国際的な多様性だけでなく、その審査の完全な「公正性」を保証することが、この定款の成立をもって、少なくとも理念上は追求されることとなったのである。

◆本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金「ポスト『西洋』音楽史の一断面としての国際音楽コンクール」(2016-2019年、特別研究員奨励費、研究課題番号16J09566)の成果の一部である。執筆にあたっては、日本音楽学会第69回全国大会(2018年11月3日、桐朋学園大学)における口頭発表の内容をもとに加筆を行った。

注

- 1 アントン・ルビンシテイン国際音楽コンクール(1895-1910)。ロシアの著名なピアニスト、ルビンシテイン Anton Rubinstein (1829-1894)によって設立されたこのコンクールは、ピアノと作曲の2部門を有し、5年に1度異なる都市(サンクトペテルブルク、ベルリン、ウィーン、パリ)で開催された。
- 2 設立当時の名称は「ヨーロッパ・コンクール連盟 Fédération des Concours d'Europe」、ついで「国際コンクール連盟 Fédération de Concours Internationaux」。1964年には「国際音楽コンクール連盟 Fédération de Concours Internationaux de Musique」に改称され、1990年代にさらに「世界 mondiale」の語がここに加わった。今日ではこのフランス語の名称 Fédération mondiale de Concours Internationaux de Musique (FMCIM)と並んで英語の公式名称 World Federation of International Music Competitions (WFIMC)が広く用いられている。
- 3 Lisa McCormick, *Performing Civility: International Competitions in Classical Music* (Cambridge: Cambridge University Press, 2015)。
- 4 定款・勸告書ともにWFIMCの公式ウェブサイト (<https://wfimc-fmcim.org/heritage-and-governance/>) 2019年3月31日最終閲覧)にて最新版のみ閲覧・ダウンロードできる。
- 5 設立時の正式名称は Concours International d'Exécution Musicale (CIEM)。
- 6 Marie Duchêne-Thégarid, *Une certaine idée de la musique : Le concours de Genève, 1939-2014* (Genève : Slatkine Reprints Editions, 2014)。なお、マコーミックの研究は前年に出版されたばかりのこの文書を参照していない。
- 7 リエージュ出身のスイスの作曲家。ジュネーヴ国際音楽コンクール創立者の一人。ローザンヌ、ベルリン、ジュネーヴ、パリで音楽を学び、1916年よりスイスに定住。ローザンヌ、ヌーシャテル、ジュネーヴの音楽院で教鞭を取り、1925年から1957年までジュネーヴ音楽院院長を務めた。
- 8 この前後の総会議事録に関しては現在探索中である。
- 9 2018年現在のWFIMC事務局長、ベンジャミン・ウッドロフ Benjamin Woodroffe氏からの提供による。
- 10 第二次世界大戦前-戦中に設立されたショパン(ワルシャワ、1927)、ブダペスト(1933)、ヴィエニャフスキ(ボズナナーワルシャワ、1935)、イザイ(ブリュッセル、1937;1951年以降エリザベート王妃国際音楽コンクールと改称)、ジュネーヴ(1939)、ロンコティポー(パリ、1943)等の先駆的コンクールが戦争による中断(ないし国内限定コンクールとしての開催)を経て再開されたことに加え、戦後にはブラハ(1947)、プゾーニ(ボルツァノ、1949)、ヴィオッティ(ヴェルチェッリ、1950)、ミュンヘン(1952)、バガニーニ(ジェノヴァ、1953)、マリア・カナルス(バルセロナ、1955) ヴィアナ・ダ・モック(リスボン、1957)、ジョルジュ・エネスコ(ブカレスト、1958)等のコンクールが続々と誕生した。ここに挙げたのはいずれも最初期からWFIMCに加わった著名なコンクールであるが、この他にも「国際」を銘打った様々な群小コンクールが各地で同時多発的に展開されていた。
- 11 たとえば1946年のジュネーヴ・コンクールは526名もの申し込みを数え、そのうち354名が実際にコン

- クールに参加した(Henri Gagnebin, "La Fédération des Concours internationaux de musique," Conservatoire de musique de Genève, FHG E 157 (Fonds Henri Gagnebin))。
- 12 アンドレ・フランソワ・マレスコッティ André-François Marescotti (1902-95)はスイス・ジュネーヴ出身の作曲家。ジュネーヴとパリでピアノ、作曲などを学び、1931年よりジュネーヴ音楽院ピアノ科教授を務める。ジュネーヴ・コンクールの初期の幹部の一人であり、ガニユバンの引退後はWFIMCの2代目の会長となった。
 - 13 Concours d'exécution musicale Genève, procès-verbaux. 18.1.55/29.XI.60, p.80-81 (Concours de Genève)。
 - 14 この最初の13のコンクールのうち、ガニユバン自身が運営するジュネーヴ・コンクールの他、ナポリ、リエージュ、ブダペストの3コンクールは、彼が1957年までにすでに審査員として視察した経験を持つものであった。一方、ガニユバンがそれまでに審査したコンクール(Gagnebin 1975: 238-239)の中でも、1936年のジュネーヴのカリヨン・コンクール Concours du Carillonと1948年のスケフェンゲンコンクールの二つは連盟の創立メンバーに加わっていない。おそらくこれらは継続性に乏しいコンクールとして連帯の対象から排除されたのであろう。
 - 15 1957年3月26日、ジュネーヴ・コンクール組織委員会議事録 (Concours d'exécution musicale Genève, procès-verbaux, p.96, Concours de Genève)。
 - 16 1957年3月26日、ジュネーヴ・コンクール組織委員会議事録 (p.96, Concours de Genève)。
 - 17 このジュネーヴ中心の体制が完全に崩れたのは、総会が毎年世界各地の異なる都市で開かれるようになる1985年以降である("WFIMC General Assembly Locations")。
 - 18 1949年に設立された非営利組織。国や大陸を越えた音楽・音楽家の交流を通じて、国際規模の諸々の音楽活動に資することを目的とする。
 - 19 戯曲「病は気から(Le Malade imaginaire)」(1673)における劇中劇の一節。
 - 20 ブラハ・コンクール代表のウィレム・ボスピシル Vilém Pospíšilの発議による。
 - 21 このコンクールの加盟可否の判断はいったん延期され、4年後の1968年によりやく加盟が認められた。
 - 22 Conservatoire de musique de Genève, FHG E 157 (Fonds Henri Gagnebin)。
 - 23 ただし、1964年度のこのコンクールは正確には「外国人審査員過半数」の原則が採択された同年の総会よりもわずかに前の時期に行われていたため、総会決議後の違反とはいえない。
 - 24 ガニユバンのアーカイブにはマリア・カナルス本人や彼女のコンクールの事務局からの書簡が多数残されており、連盟の会長とこのスペインのコンクールとの結びつきの強さを示唆している。
 - 25 1964年コンクールの4名のファイナリストのうち、スペイン籍の入賞者は女性第2位の1名のみ。
 - 26 Conservatoire de musique de Genève, FHG E 157 (Fonds Henri Gagnebin)。
 - 27 ジュネーヴ・コンクール側は、コンテストの派遣の条件として自国の審査員の参加を求めるソ連の要求を、既に決定・発表された審査員リストを変更することはできないという理由で拒絶した(1957年3月26日、ジュネーヴ・コンクール組織委員会議事録 (p.99, Concours de Genève))。
 - 28 1957年3月26日、ジュネーヴ・コンクール組織委員会議事録 (p.97, Concours de Genève)。
 - 29 フランスの作家シャルル・モーラス Charles Maurras (1868-1952)を指す。
 - 30 1957年3月26日、ジュネーヴ・コンクール組織委員会の議事録 (p.98, Concours de Genève)における発言。

31 このMcCormickの主張は連盟設立当時ではなく、今日の定款等の内容に依拠したものであると思われる。

主要参考文献

刊行物

- Alink, Gustav A. *International Piano Competitions: Book 3, the Results*. s'Gravenhage: Gustav A. Alink, 1990.
- Bouckaert, Thierry. *Le rêve d'Elisabeth: cinquante ans de Concours Reine Elisabeth*. Bruxelles: Éditions Complexe, 2001.
- Cline, Eileen T. "Piano Competitions: An Analysis of their Structure, Value, and Educational Implications." PhD dissertation, Bloomington: Indiana University, 1985.
- Duchêne-Thégarid, Marie. *Une certaine idée de la musique : Le concours de Genève, 1939-2014*. Genève: Slatkine Reprints Editions, 2014.
- Fleming, John. "Competition: Insights from the Horse's Mouth. An Interview with Benjamin Woodroffe, Secretary General of the World Federation of International Music Competitions (WFIMC)." *A Musical America Guide to Top Competitions* (February 2018): 2-5.
<https://www.musicalamerica.com/pages/?pagename=competitions2018&header> (Last accessed: November 1, 2018)
- Gagnebin, Henri. *Orgue missette et bourdon: souvenirs d'un musicien*. Neuchâtel: A la Baconnière, 1975.
- Horowitz, Joseph. *The Ivory Trade: Music and the Business of Music at the Van Cliburn International Piano Competition*. Boston: Northeastern University Press, 1990. [ジョーゼフ・ホロウィッツ「国際ピアノ・コンクール」奥田忠二訳、早稲田出版、1995年]
- 神保夏子「フランス・ピアノ楽派の「危機」——第二次世界大戦後の国際音楽コンクールとバリ国立高等音楽院」『国立音楽大学研究紀要』52 (2018): 31-41.
- Liebstoekel, Frédéric. *Nos 7000 enfants : derrière les coulisses des Concours internationaux d'exécution musicale de Genève 1939-1977*. Genève: Henn-Liechti, s.d. [c1977].
- McCormick, Lisa. *Performing Civility: International Competitions in Classical Music*. Cambridge: Cambridge University Press, 2015.
- Mili, Isabelle. "En quête d'avenir: les concours en crise." *Dissonanz/Dissonance* 42 (November 1994): 16-17.
- Tomoff, Kiril. *Virtuosi Abroad: Soviet Music and Imperial Competition during the Early Cold War, 1945-1958*. Ithaca: Cornell University Press, 2015.
- World Federation of International Music Competitions (Fédération mondiale des concours internationaux). "WFIMC Annual Book / FMCIM Brochure annuelle." Genève: WFIMC/FMCIM, 2018.
<http://www.wfimc.org/Webnodes/en/Web/Public/Home> (Last accessed: November 1, 2018)
- "Recommendations for an international music competition." Adopted by the General Assembly in Warsaw, 2011.
<http://www.wfimc.org/Webnodes/en/Web/Public/Home> (Last accessed: November 1, 2018)
- "Statutes of the World Federation of International Music Competitions." Approved at the General Assembly in Yerevan, 2016.
<http://www.wfimc.org/Webnodes/en/Web/Public/Home> (Last accessed: November 1, 2018)

未公刊物・アーカイヴ資料

国際音楽コンクール世界連盟 (World Federation of International Music Competitions) 事務局

FMCIM Brochure 1958-1959.

Fortieth General Assembly of the World Federation of International Music Competitions in Vienna and Budapest on April 11, 12, 13 and 14, 1996.

Languin, Philippe et al. "Internal Seminar: Next 50 years." 50th General Assembly of the World Federation of International Music Competitions, Geneva, April 28-30, 2006.

WFIMC General Assembly Locations.

ジュネーブ音楽院附属図書館 (Conservatoire de musique de Genève)

①アンリ・ガニユバン・アーカイヴ Fonds Henri Gagnebin

FHG E 156 : [Correspondance concernant le Concours international d'exécution musicale de Genève]

FHG E 157 : [Correspondance concernant la Fédération des Concours internationaux de musique]

FHG E 221 : [Correspondance et documents concernant les Concours internationaux, 1948-1960]

FHG E 222 : [Correspondance et documents concernant les Concours internationaux, 1961-1969]

FHG E 224 : Fédération des Concours internationaux : [brochures]

FHG J 22 : Souvenirs d'un musicien : en l'honneur du 90ème anniversaire de M. Henri Gagnebin.

FHG L 128 : Gagnebin, Henri. « Moscou vu par le gros bout de la lorgnette. » *Tribune de Genève* (28 June 1966)

FHG L 161 : Gagnebin, Henri. « A Genève, derrière les paravents du Concours d'exécution musicale. » *Tribune de Genève* (3 October 1967)

FHG L 162 : Gagnebin, Henri. « Un flot de musique a déferlé sur Bucarest pour le Concours international d'exécution musicale et le festival George Enesco. » *Tribune de Genève* (4 October 1967)

②その他 (Conservatoire de Genève)

Ae 12484 : Concours international de musique : Genève 1934 : 12, 13, 14, 15 août : livret-guide officiel.

Z 80 ; Ar : Concours international Eugène Ysaÿe = Internationale Wedstrijd Eugène Ysaÿe.

ジュネーブ国際音楽コンクール (Concours de Genève) 事務局

Concours d'exécution musicale Genève. Procès-verbaux. 2. XII. 60/3. X. 64.

Concours d'exécution musicale Genève. Procès-verbaux. 17. XI. 47/3. XII. 54.

Concours d'exécution musicale Genève. Procès-verbaux. 18. I. 55/29. XI. 60.